



TITLE:

静脩 Vol. 11 No. 1 (1974.10) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 11 No. 1 (1974.10) [全文]. 静脩 1974, 11(1)

ISSUE DATE:

1974-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65951>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1974年 10月

Vol. 11, No. 1

ご 挨拶

附属図書館長 林 良 平

しばらく、この静脩の出版がおくれていた。さきの館長堀江保蔵教授が学内の図書ないし図書館に関するコミュニケーション、とりわけ全学に広く分散している図書室の職員の連絡業務・研究の活発化を願われて、創始されたことは極めて貴重なことであり、それなりに今日まで、全学的役割を果たしてきたと考えている。

わたくしが、昨年春、はからずも附属図書館長に選ばれて以来、残念ながら、わたくしなりの気持を、誌上をかりてご挨拶申し上げることが延引してしまっているが、創始以来の方針が今後も踏襲せられるべきことはいまでもない。ただ発刊以来十年近く経た今日、大学図書・図書館の問題は、それなりに量・質ともに変遷があり、また、われわれのなすべきことも、これに対応して変化のあるべきことは否定できない。

この十年の歩みを振り返れば、何よりもその間の図書あるいはその他の方法を通じての情報量の飛躍的増大が指摘されねばならない。またそのため、これを入手する方法に従前とは異なった一段の努力が必要のみならず、その手段にも質的にも異なった方策を考え出

さねばならなくなったことが痛感される。さらに、これらの購入、設備運営に対する費用も飛躍的に増大している。今日各研究者はこの情報の収集、整理、伝達に、研究者固有の職分たる思索の時間を大きく割かねばならなくなっている。これに対応する図書系職員も、格段の努力のみならず能力の増大を要求されている。ただでさえ増大する事務量に加えて、新しい運営のための職員そのものの研究への時間が要求されている。しかも、予算の絶対的不足、能率化のための機械化への要望とそれに対する対応、山積する諸問題は、個々にみれば、小さな問題のようにみえるが、それを未解決のまま放置すれば、やがて大学を襲う基本的かつ至難な一大問題となつてわれわれを苦しめるおそれすらないとはいえない。

この機会に、逐次大学図書館に関する諸問題を図書館・図書室のがわからず、また研究者のがわからず、相互に問題提起し、本誌をその対話の場としたい。それぞれについては、わたくしもまた折にふれて今後皆様に訴えていきたいと考えている。この機会にわたしの卒直な気持ちを申し述べてご挨拶に代えさせていただきます。

昭和 48 年度本館利用状況について

本館では、毎年度 1 年間の利用状況を日計・月計・年計にまとめている。利用統計の種類は利用者別、分類別、種別（指定図書・貴重図書など）の 3 種類で、それぞれを利用区分（閲覧と貸出）と配架区分（開架と庫内）とに区分している。今ここに掲載するものは、(1)利用者別＜表 1＞、(2)分類別＜表 2＞、の 2 種類と、開架図書の利用についての利用者別と主題別利用状況を集計比較した「開架図書利用比（冊数）」＜図 1＞である。これは昭和 48 年 10 月～12 月の 3 カ月間だけを抽出して行なったものである。

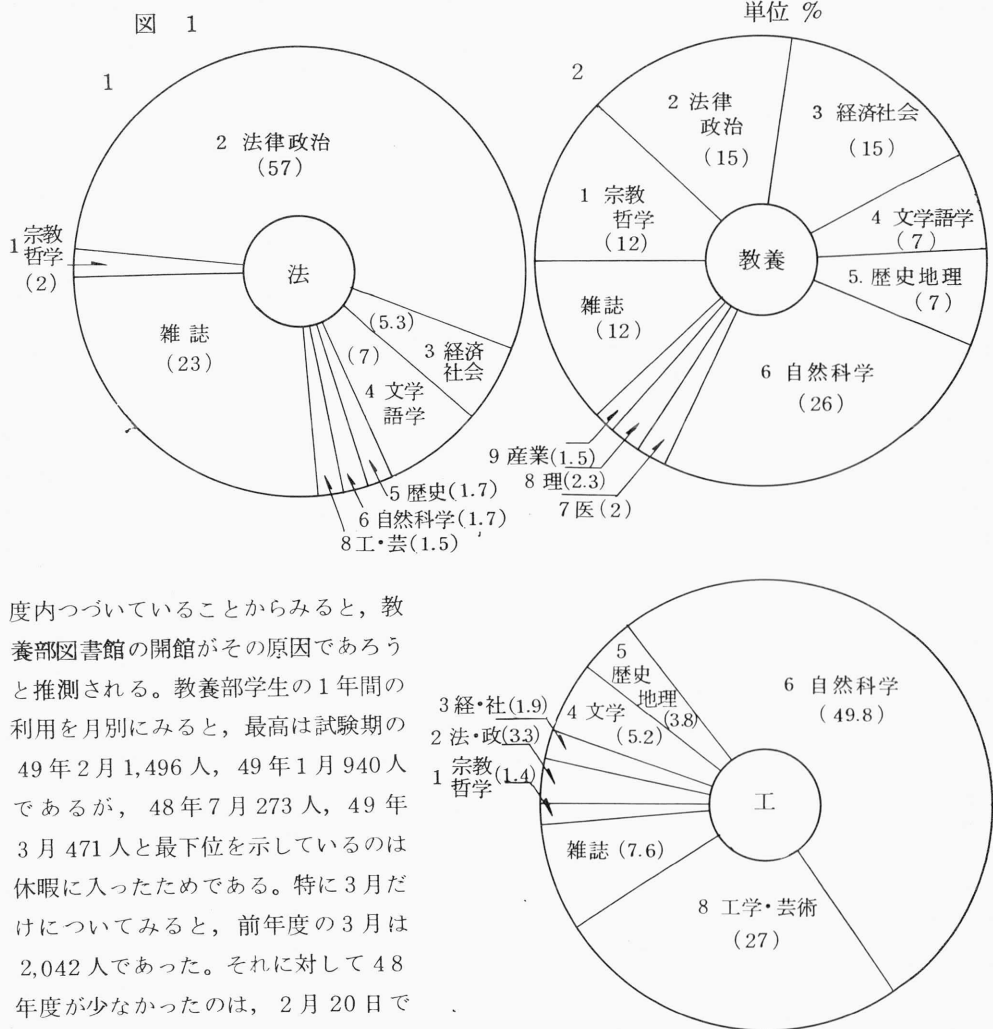
昭和 48 年度の総利用数は、昭和 47 年度に

比べて約 20 % 減（15,787 冊、9,925 人）であった。減数の内訳は、冊数は開架図書が 16,128 冊、庫内図書（貸出）が 969 で、合計 17,097 冊となっている。庫内図書の閲覧はわずかながら（1,310 冊）増である。人員では、開架図書（閲覧のみ）が 9,691 人と大きく下回っているほか、庫内図書でも閲覧 24 人、貸出 210 人といずれも減っており、合計 9,925 人であった。その原因はいろいろ考えられるが、特にはっきりしているのは、昭和 48 年 5 月 8 日を境にして、教養部学生の開架図書の利用がそれ以前と比べて 30 % 前後の減少となっていることである。この現象は年

表 1 I 利用者別利用状況

利用者別 利用区分		閲 覧			貸 出	合 計		和 洋 別		百分比
		開架	庫内	計	庫内	冊数	人員	和	洋	% (冊)
1. 学 生	教 養	冊 13,567	冊 1,786	冊 15,353	冊 1,367	冊 16,720	人 9,507	冊 16,592	冊 128	21.4
	法	17,381	603	17,984	696	18,680	10,069	18,657	23	23.8
	経	954	157	1,111	168	1,279	786	1,259	20	1.6
	文	3,106	1,372	4,478	1,333	5,811	3,100	5,741	70	7.4
	教 育	207	91	298	68	366	202	346	20	0.5
	工	7,269	449	7,718	229	7,947	4,638	7,906	41	10.1
	理	4,736	197	4,933	210	5,143	2,951	5,054	89	6.6
	農	982	102	1,084	223	1,307	824	1,148	159	1.7
	医	292	53	345	26	371	197	366	5	0.5
	薬	447	11	458	12	470	269	470	0	0.6
2. 大 学 院 生		2,407	3,258	5,665	2,821	8,486	3,131	8,158	328	10.8
3. 職 員		343	1,163	1,506	3,078	4,584	1,538	4,336	248	5.9
4. 研修員ほか		408	2,308	2,716	604	3,320	734	3,170	150	4.2
5. 学 外 者		155	3,669	3,824	0	3,824	702	3,641	183	4.9
合 計		52,254	15,219	67,473	10,835	78,308	38,648	76,844	1,464	100.0

Ⅲ 開架図書利用比 (冊)



度内つづいていることからみると、教養部図書館の開館がその原因であろうと推測される。教養部学生の1年間の利用を月別にみると、最高は試験期の49年2月1,496人、49年1月940人であるが、48年7月273人、49年3月471人と最下位を示しているのは休暇に入ったためである。特に3月だけについてみると、前年度の3月は2,042人であった。それに対して48年度が少なかったのは、2月20日で試験が終り、翌日から春季休業となったためである。そのほかの本館第一閲覧室の天井補修工事のため、やむを得ず48日間休館(48年7月から9月5日まで)せざるを得なかったこともその理由と考えられる。

昭和48年度の総利用数は、前年度(47年度)が史上最高であったため、その差が気になるが、過去8年間の年平均81,340冊、44,396人からみれば大体平均値に近い利用数といえよう。統計表のなかで貸出欄に「開架」の項目がないのは、開架図書は現在、貸出を実施していないためである。表のなかで、学

部学生は教養課程と専門課程に分け、後者は部局別に集計している。「職員」には、教官だけでなく事務系職員なども含んでいる。

分類別利用状況<表2>では、和・洋の分類表が異なるため別統計となっているが、洋書が極端に少ないのは、本館では、洋書は語学辞書・参考図書以外はほとんど購入していないこと、そのための開架図書は和書だけであり、開架図書の洋書48冊の利用は語学辞書である。利用の内訳は、開架図書は(1)2門35.8%、(2)6門30.2%、(3)3門6.8%

表2 II 分類別利用状況

分類別				利用区分		閱 覧			貸出	合計
						開架	庫内	小計	庫内	合計
II 分 類 別 利 用 状 況 (未製本雑誌を除く)	和 書	1. 00～49・60～88	宗教・哲学	2,383	1,528	3,911	1,184	5,095		
		50～59	教 育	548	289	837	162	999		
		2. 00～48	法律・政治	16,198	490	16,688	860	17,548		
		3. 00～63	経 済・社会	3,075	773	3,848	909	4,757		
		4. 00～59	文 学	2,189	3,295	5,484	2,685	8,169		
		60～89	語 学	1,193	196	1,389	182	1,571		
		5. 00～89	歴史・地理	1,902	2,327	4,229	1,771	6,000		
		6. 00～49	自 然 科 学	13,649	335	13,984	267	14,251		
		7. 00～48	医 学	427	252	679	111	790		
		8. 00～10	工 学	2,491	119	2,610	78	2,688		
		20～29	軍 事	43	97	140	49	189		
		40～87	芸 術	644	420	1,064	372	1,436		
		9. 00～69	産 業	310	326	636	324	960		
		10. 00～10	全書・叢書	172	2,379	2,551	1,041	3,592		
		20～29	図 書 館 学	2	60	62	166	228		
		計			45,226	12,886	58,112	10,161	68,273	
	洋 書	1. 0～7・9	Philosophy		16	16	47	63		
		8	Aesthetics		2	2	0	2		
		2. 0・3～9	Social sciences		30	30	79	109		
		1～2	Religion		14	14	27	41		
		3. 0～9	Philology	48	90	138	7	145		
		4. 0	Library science・Bibliography		22	22	84	106		
		1～9	Literature		45	45	110	155		
		5. 0～9	History		96	96	44	140		
		6. 0～10	European History		18	18	40	58		
		7. 0～9	Sciences		48	48	73	121		
		8. 0・1～3	Art・Music・Theatre・Sports		24	24	97	121		
		0・4～6・8～9	Industries		4	4	6	10		
		7	Agriculture		1	1	2	3		
		8	Military		0	0	0	0		
		9. 0～9	Geography & Travels		0	0	10	10		
		10. 0～12	Encyclopaedia & Periodicals		229	229	48	277		
		計			48	639	687	674	1,361	
		和書・洋書合計				45,274	13,525	58,779	10,835	69,634

(いずれも冊数比)であるがこれは<表1>の百分比でも解るように、法学部学生、工学部学生の利用が多いためであり、<図1>とも同一の内容である。庫内図書は、閲覧・貸出ともに4門が第1位で25%を上回っている。閲覧では10門18.5%(雑誌はここに含む)、貸出では5門17.4%が第2位である(閲覧では5門は第3位18.1%)。配架冊数をみると16,066冊のうち、2門20.7%、6門19.4%(49年3月末)と計41.1%も占める蔵書構成であること、また、庫内図書の蔵書構成が4門18%、5門14%(いずれも推定)で、2部門だけで30%を超えていることなどからみて、当然の結果ながら構書構成と利用とが密接な関係にあることが窺える。

<図1>の、開架図書の利用比では法学部

<図1-1>と工学部<図1-3>の専門課程では、専攻領域の主題が50%前後を占め、それ以外の領域の大部分が5%以下という利用差となっている。法学部で「雑誌」が23%も占めているのは、開架図書には法学関係の雑誌のバックナンバーを配架(他の雑誌は新着号のみ配架)しているためである。これに対して、教養課程の学生の利用<図1-2>は6門が比較的利用が多いだけで、他は平均した利用率を示していることは、教養課程と専門課程の利用する図書の違いをはっきりさせている。本館では、利用者別と分類別統計を切り離した統計表となっているため、前にも述べたとおり<図1>は今回だけの抽出調査によってつかめたもので、こんごは利用統計表を検討する必要がある。

学術雑誌総合目録自然科学欧文編 1975年版刊行の準備すすむ

全国の大学や主要研究機関等が所蔵する自然科学系の欧文雑誌を網羅する総合目録が、文部省監修、(財)国際医学情報センター編集、(株)紀伊国屋書店の製作によって、来年3月に刊行される予定である。この種の目録としては、すでに1966年版があるが、約10年ぶりの企画である。年毎に著しく増大してゆく学術雑誌の所蔵目録を、これまでのように、手作業で作成しては、出来上るまでに何年もの歳月を必要とし、内容の新鮮さが全く失われてしまう。このようなことをなくするために、今回は画期的な試みとして、電子計算機による編集・製作という方式がとられる。こうすることによって、作業の迅速化・合理化を計ると同時に、将来の発展にそなえて基礎づくりをするという意図もある。今年始めから、編集担当機関による予備版の作成、各所蔵機関からのデータ提出について、

編集、製作と進み、今年度中に刊行を済ませるという計画である。なお将来は、今回磁気テープの形で保存されるデータ・ベースを基礎に、各館からの追加的データ提出に基づき、1年ごとに補遺版を、4年ごとに改訂版を刊行する予定であると聞く。

7月末に本学にも所蔵データ提出の依頼がきている。約33,000タイトルを包含する予備版(2分冊)と照合しながら、本学雑誌の所蔵事項をデータ記入用紙に転記して10月末日までに提出するべく、洋書目録掛を中心に作業をすすめている。「京都大学欧文雑誌総合目録自然科学編1972年版」に記載されている雑誌と、同目録作成以後、部局から報告を受けた若干の変更分をあわせて約9,000タイトル、20,000件を報告することにした。何分ぼう大な量であるうえに、所蔵巻号等の正確を期するために、再調査を要するものに

再三遭遇するので、作業ははかばかしくは進まない。目下全量の4分の1といったところであろうか。

再調査にあたっては、各所蔵部局図書室の

協力をいただき、厚くお礼申し上げると同時に、今後とも惜しみないご協力をお願いする次第です。(洋書目録掛)

京都大学和文雑誌総合目録の編集作業

本学所蔵の雑誌総合目録の一環として、本年度は和文雑誌総合目録を刊行することとなった。これはさきに刊行された1967年版ならびに補遺の改訂版である。

旧版刊行後の異動と新規架蔵雑誌について5月以来各部局図書室に、昭和49年3月31日現在で調査をお願いしていたが、このほど

報告の提出が完了した。予想以上に異動訂正や新規雑誌が多く、編集にかなりの時間がかかりそうであるが、11月印刷に付すことを目標にして目下編集に努力している。編集、印刷、校正などが順調に進行すれば、来春3月には刊行される予定である。

近畿地区国公立大学図書館協議会

1. 研究集会活動

8月26日(月)午後1時30分より、新築成った京都府立大図書館を会場にして、本年度第1回の施設に関する研究集会を開催した。京都府大図書館の設計は、いわゆるモデュラ・プランニングを基本としており、その点で、将来における内部空間の互換性が考慮されていることと、身障者に対する細かい配慮が、とくに興味深い。当日は80名近い参加者があり、本学からも21名の参加者があった。

9月6日(金)午後1時30分より、楽友会館で、「アメリカの大学図書館における相互協力について」と題して、大阪大学図書館田中久文氏の在外研修報告を中心とした研究集会を開催した。2時間にわたって、田中氏よりアメリカの最新の実情について報告があつ

た後、大阪府大堀事務長の司会により質疑討論を行なった。約60名の出席があり、本学からの出席者は26名であった。

2. 委員会活動

企画委員会は、9月6日(金)10時半から、楽友会館で本年度第2回目の会合を開き、今後の研究集会計画について検討した。その結果、10月18日(金)には、主題別研究集会の本年度の第1回として、「理工系図書館における図書館資料の収集ならびに保存」について、京都芸芸繊維大学で開催する。11月には、施設研究集会の第2回目を兵庫県立図書館で開催することになった。

また、参考図書委員会は8月28日(水)に大阪女子大で、図書館統計委は9月3日(火)に和歌山大学で、それぞれ開催された。